

グループ4

テーマ：新しい教育のビジョン—「生きること」と「学ぶこと」から—

はじめに

私たちのグループでは、「学ぶこと」の意味を考えることを試みた。その中で、「学ぶこと」は「生きること」と密接に関わっており、不可分のものであると考えた。「学ぶこと」は、何かに気づくことであり、他者との関係の中に生まれるものである。さらに、「学ぶこと」と一言で言っても、生きるための直接的な手段としての学びもあれば、知的好奇心等による探求的な学びもあり、意図した学びもあれば、予期せぬ無意図的な学びも存在する。一方、「生きること」は、抽象的概念であるがゆえに「死」との対立概念として浮かびあがるものであり、定義自体も非常に困難なものであるが、「できることをすること」や「生存するために何かを学び続けること」等がこれに当たるのではないかと考えた。そして、「生きること」は「学ぶこと」と同様、他者との関係の中でよりはっきりと意味づけられる。これらを踏まえ、私たちは、本質的に「学ぶこと」とは、よりよく「生きること」であり、いかに生きるかということに集約されるのではないだろうかと思えた。

ゆえに、本来「学ぶこと」は、よりよく「生きること」であり、明るい将来への展望とならねばならない。しかしながら、現代社会は複雑化・多様化が進み、学ぶ者にとっての将来の展望が不透明なものとなり、「生きること」に不安を持ちやすい状況が発生していると考えられる。すなわち、「学び」の本来の理想とする姿と現状がかけ離れたものとなっているのではないだろうか。このような観点から、本発表では、「現在、学ぶ者にとって既存の教育は妥当なものだろうか」という問題を提起したい。

現代社会の病理

バブルが崩壊した後、私達の暮らす日本社会の有り様は大きく変化していった。長期不況やグローバル化による国際競争力の激化によってもたらされた雇用形態の変化により、企業は正規採用を抑えるようになり、いくら勉強しても就職することが出来ない若者が増えていった。このことは、“頑張っても勉強をすることにより、よい会社に入ることができ、それによってよい生活を送ることができる”という従来の日本に蔓延していた考え方に変化を与えた。努力しても報われることが難しくなったこの現実には、若者の学習意欲を低下させ、彼らの将来の展望が不明確で不安なものへとなっていった。

その具体的な事例としてニート問題がある。ニートとは一般的に働く意欲のない若者というニュアンスで説明されがちであるが、実態はそうであるとは限らず、働きたくても働けないタイプの『ニート』が増えているのが現実である。さらに働きたくないニートでも不登校やいじめの経験があるなど、何らかの「事情」を抱えている場合が多い。にも関わらず、世間ではこのような学生に対し、バッシングがなされ、さらなる将来不安を抱えさ

せる要因となった。

現代の教育の実情

これらの社会の変化に対して、現在の教育のあり方および職業と教育の関係の現状はどのようなものであろうか。高等教育において職業訓練的な役割という観点から見ても、中途半端な教養教育や世界的にみても職業との関連性の低い教育がなされている。このことは、採用基準が明確でない、採用プロセスが開示されていないなど新卒採用プロセスに問題があるとされる。そもそも、個人の評価に関していっても、教育機関における評価の方法と企業の採用における評価の方法に差が見られる。さらに、卒業前から就職活動をするため、学生は企業に対し、「何を学んできたか」の打ち出しようがない。

本来の「学ぶこと」の意味

ところで、前述のように、本来「学ぶこと」とは何かという問いに対して、私たちのグループでは、それは「よりよく生きること」と密接な関係にあるとの結論に達した。すなわち、よりよく生きるには、明るい将来の展望がなければならないのではないだろうか。

この点に鑑みれば、現在行われている教育は、本来の学ぶという意味とは大きくかけ離れたものであり、教育を受ける者、つまり学ぶ者にとって適当なものであるとはいいがたく、見直す必要があると考える。

これからの教育はいかにあるべきか

前述のように、我々の考える「学ぶこと」の本来の意味および教育の有する文化伝達の機能と現在の教育の実情とを照らし合わせた時、その乖離は甚だしく、決して無視できない大きな問題となっているのではないだろうか。

現在の教育と私たちの考える理想との乖離をいかにして埋めるべきか

社会には教育の他、職場や家族など様々なファクターが存在する。現在の教育は、これらのファクターとの関連性が大変希薄となっている。よりよい教育を行うためにはこれらのファクターとの連結を強めるべきであろう。その連結をなすためには、例えば、ソーシャルキャピタルの考えでも出ているように、NPO や NGO の活動といったものが重要な役割を果たすことになるのではないだろうか。

<参考文献>

- ・ 竹内洋「知識、教養、教育：歴史的考察と今後の展望」2008年。
- ・ 本田由紀『軋む社会』双風舎、2006年。
- ・ 本田由紀「日本における『学校から仕事への移行』の諸問題」2008年。

- 本田由紀『若者と仕事』東京大学出版会、2005年。
- 本田由紀、内藤朝雄、後藤和智『「ニート」って言うな!』光文社、2006年。